

1.2.3 1次独立と基底

定義 1.11 何個かのベクトルの組 v_1, \dots, v_n が次の性質をもつとき **1次独立** (linearly independent) であるという：任意のスカラー c_1, \dots, c_n に対し

$$c_1 v_1 + \dots + c_n v_n = \mathbf{0}$$

が成立していれば $c_1 = \dots = c_n = 0$

係数がすべて0のときはいつでも1次結合のベクトルが0になる。この定義はその逆が成立する事を主張するものである。

$n = 1, 2, 3, 4$ の場合1次独立が何を意味しているか具体的にみよう。

最初は $n = 1$ の場合： v_1 に対し $c_1 v_1 = \mathbf{0}$ から $c_1 = 0$ が出てくるための必要十分条件は $v_1 \neq \mathbf{0}$ である。即ち1個のベクトル v が1次独立である必要十分条件は $v \neq \mathbf{0}$ である。

次に $n = 2$ の場合： $c_1 v_1 + c_2 v_2 = \mathbf{0}$ から $c_1 = c_2 = 0$ が出てくるためには、 v_1 と v_2 が $\mathbf{0}$ と異なり、2つのベクトルの方向が異なる事が必要十分である。この事は否定命題の方が分かりやすいかもしれない。今 $c_1 v_1 + c_2 v_2 = \mathbf{0}$ で $c_1 \neq 0$ または $c_2 \neq 0$ が成立しているとする。 $c_1 \neq 0$ のときは $v_1 = -\frac{c_2}{c_1} v_2$ と書ける。 $c_2 \neq 0$ のときは $v_2 = -\frac{c_1}{c_2} v_1$ と書ける。いずれの場合も一方のベクトルは他方のベクトルの実数倍になっている。

$n = 3$ の場合： v_1, v_2, v_3 が1次独立である必要十分条件は3つのベクトルが平行6面体の3辺になっている事である。1次独立を否定すると、 $c_1 v_1 + c_2 v_2 + c_3 v_3 = \mathbf{0}$ かつ $c_1 = 0$ または $c_2 = 0, c_3 = 0$ が成立する。 $c_3 \neq 0$ とすると、 $v_3 = -\frac{c_1}{c_3} v_1 - \frac{c_2}{c_3} v_2$ と表す事ができる。このとき v_3 は v_1 と v_2 が張る平面上に存在する。 $c_1 \neq 0, c_2 \neq 0$ の場合も同様にできる。

$n = 4$ の場合：後で示すが、 $n \geq 4$ の場合はいつでも1次独立ではない。それならば一般的な定義をしなくてもいいのではないかと思う人もいるかもしれない。我々が今取り扱っている3次元のベクトルの場合は上記の様になるが、一般のベクトルに対してもこの定義は一般化され、その場合は上記の事は成立しない。

命題 1.12 ベクトル v_1, \dots, v_n, v_{n+1} について次の2つは同値。

- (1) ベクトル v_1, \dots, v_n, v_{n+1} は1次独立である。
- (2) ベクトル v_1, \dots, v_n は1次独立であり、 $v_{n+1} \notin \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ が成立する。

証明 (1) \Rightarrow (2) 定義より v_1, \dots, v_n が1次独立なのは明らか。もし $v_{n+1} \in \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ とすると、実数 a_1, \dots, a_n が存在して $v_{n+1} = a_1 v_1 + \dots + a_n v_n$ となるが、これは

$$a_1 v_1 + \dots + a_n v_n + (-1)v_{n+1} = \mathbf{0}$$

となり、1次独立性に矛盾。

(2) \Rightarrow (1) 1次独立でないとするどれかは0でない実数 a_1, \dots, a_n, a が存在して

$$a_1 \mathbf{v}_1 + \dots + a_n \mathbf{v}_n + a \mathbf{v} = \mathbf{0}$$

が成立する。ここで $a = 0$ とすると $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ の1次独立性に反するので $a \neq 0$ 。よって移行して

$$\mathbf{v}_{n+1} = \left(-\frac{a_1}{a}\right) \mathbf{v}_1 + \dots + \left(-\frac{a_n}{a}\right) \mathbf{v}_n$$

が得られ、 $\mathbf{v} \in \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$ となり矛盾。

演習問題 1.15 次のベクトルの組が1次独立かどうか調べよ。

(1) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$

(2) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ a \end{pmatrix}$ (a は定数)

(3) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} a \\ a \\ a \end{pmatrix}$ (a は定数)

(4) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$

(5) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$

(6) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ a \end{pmatrix}, \mathbf{v}_3 = \begin{pmatrix} 4 \\ b \\ 2 \end{pmatrix}$ ただし a, b は各自の出席番号の下
2桁と1桁。

(7) $\mathbf{v}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \mathbf{v}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, \mathbf{v}_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ p \\ 3 \end{pmatrix}$ ここで p, q はある定数。

命題 1.13 ベクトル空間 V の元 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ について次の2つは同値。

(1) ベクトル \mathbf{a} に対し2通りの表示

$$\mathbf{a} = a_1 \mathbf{v}_1 + \dots + a_n \mathbf{v}_n$$

$$\mathbf{a} = b_1 \mathbf{v}_1 + \dots + b_n \mathbf{v}_n$$

があれば $a_1 = b_1, \dots, a_n = b_n$ 。

(2) スカラー c_1, \dots, c_n に対し

$$c_1 \mathbf{v}_1 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

が成立していれば $c_1 = \dots = c_n = 0$ 。

証明 (1) \Rightarrow (2) $\mathbf{0} = 0\mathbf{v}_1 + \dots + 0\mathbf{v}_n$ という表示はいつでもあるので $c_1 \mathbf{v}_1 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$ とすると $c_1 = 0, \dots, c_n = 0$ 。よって O.K.。

(2) \Rightarrow (1) 2通りの表示

$$\mathbf{a} = a_1 \mathbf{v}_1 + \dots + a_n \mathbf{v}_n$$

$$\mathbf{a} = b_1 \mathbf{v}_1 + \dots + b_n \mathbf{v}_n$$

に対し最初の式から次の式を引くと

$$\mathbf{0} = (a_1 - b_1) \mathbf{v}_1 + \dots + (a_n - b_n) \mathbf{v}_n$$

よって $a_1 - b_1 = 0, \dots, a_n - b_n = 0$ より O.K.。 ■

演習問題 1.16 $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{x}_3$ は 1 次独立とする。 $\mathbf{y}_1 = \mathbf{x}_1, \mathbf{y}_2 = \mathbf{x}_1 + \mathbf{x}_2, \mathbf{y}_3 = \mathbf{x}_1 + \mathbf{x}_2 + \mathbf{x}_3$ に対し, $\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \mathbf{y}_3$ は 1 次独立かどうか調べよ。

また $\mathbf{y}_1 = \mathbf{x}_1 + \mathbf{x}_2, \mathbf{y}_2 = \mathbf{x}_2 + \mathbf{x}_3, \mathbf{y}_3 = \mathbf{x}_3 + \mathbf{x}_1$, に対し $\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \mathbf{y}_3$ が 1 次独立かどうか調べよ。

更に $\mathbf{y}_1 = \mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2, \mathbf{y}_2 = \mathbf{x}_2 - \mathbf{x}_1, \mathbf{y}_3 = \mathbf{x}_1 + \mathbf{x}_3$ に対し $\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \mathbf{y}_3$ が 1 次独立かどうか調べよ。

$\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_3$ を基本ベクトルとする。即ち

$$\mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} \quad \mathbf{e}_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

とする。任意の \mathbf{R}^3 のベクトル \mathbf{v} に対し, 実数 x_1, x_2, x_3 が唯一組存在して $\mathbf{v} = x_1 \mathbf{e}_1 + x_2 \mathbf{e}_2 + x_3 \mathbf{e}_3$ と表す事ができる。この様な性質を持つベクトルの組は基本ベクトルに限らない (演習問題 1.17 参照)。ここでは部分空間に関してその様なベクトルの組を考える。

定義 1.14 部分空間 W に対し次の様な性質をもつ W のベクトルの組 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ が存在する時これを W の**基底** (base) と呼ぶ。つまり,

(1) 任意のベクトル $\mathbf{v} \in W$ に対し実数 a_1, \dots, a_n が存在して

$$\mathbf{v} = a_1 \mathbf{v}_1 + \dots + a_n \mathbf{v}_n$$

と書き表せる。

(2) この書き表し方は一意的, つまり 2通りの表示

$$\mathbf{a} = a_1 \mathbf{v}_1 + \dots + a_n \mathbf{v}_n$$

$$\mathbf{a} = b_1 \mathbf{v}_1 + \dots + b_n \mathbf{v}_n$$

があれば $a_1 = b_1, \dots, a_n = b_n$ が成立する。

命題 1.15 部分空間 W の元 v_1, \dots, v_n について、基底であるための必要十分は v_1, \dots, v_n が 1 次独立であり、 W を生成すること、即ち $W = \langle v_1, \dots, v_n \rangle$ である。

この命題を定義 1.14 の代わりに定義に採用する事ができる。実際これを定義に採用している本も多い (参考書もこの立場)。

演習問題 1.17 次のベクトルの組が W の基底である事を示せ。

$$(1) \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, W = \mathbf{R}^3$$

$$(2) \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 4 \end{pmatrix}, W = \mathbf{R}^3$$

$$(3) \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}, W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$$

$$(4) \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x - 2y + z = 0 \right\}$$

$$(5) \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0, x - 2y + z = 0 \right\}$$